図書館だより

令和7年5月2日発行
5月号
郡山第五中学校　図書委員会
2−3　2−5
学校司書　渡邉　恵美

～ようこそ学校図書館へ～
　学校図書館は、たくさんのおもしろい本と出会う読書の場所、わからないことや興味のあることを調べる学習の場所です。今年度もみなさんの読みたい、知りたい気持ちを応援します。どんどん利用してください。本がみなさんを新しい世界へと案内します。

郡山五中図書館
マスコットキャラクター
雪山　雪花（ゆきやま　せっか）です！

4/23～5/12はこどもの読書週間です。今年の標語は、「あいことばは　ヒ・ラ・ケ・ホ・ン」です。こどもの読書週間は、「こどもたちにもっと本を、こどもたちにもっと本を読む場所を」という願いから、1959年に制定されました。図書館や書店ではいろいろな催しが行われています。参加してみましょう。

図書委員おすすめの本

２－３

それを世界と言うんだね
綾崎 隼

　少女は薔薇の花畑で目覚めた。すぐ近くには白い小城があり、そこは物語管理局という時空の間だった。城には物語に登場するキャラクターが暮らしていて、城主は親指姫。自分の正体がわからない少女は自分の正体を知るために「王子」と呼ばれている少年と物語管理官として働くことに。物語の世界で不幸になったものを救うために「マッチ売りの少女」「裸の王様」などの作品に入るが王子がある禁忌を犯してしまい....。
　とてもおもしろいのでぜひ読んでみてください。

２－５

ももこの話
絵と文・さくらももこ

　いつも食べきれなかった給食や、自分のおこづかいをつぎ込んだ紙芝居屋、書き初めの宿題、バレンタインデーの日のこと、友達との想い出…、さくらももこさんの小学3年生時代を書き連ねたベストセラーエッセイです。
　涙が出るほど笑ったあとは、あのころを思い出して胸があたたかくなる。
　センチメンタルになった時は、ぜひ、くすっと笑えるこの一冊を手に取って読んでみてください。

先生のおすすめの本

三浦 知美先生

題名　さよなら、田中さん　　作者　鈴木るりか

　この本は、作者が中学2年生の時に書いた本です。「中学2年生が、こんなに上手に書いたの？　読み終わってしまうのがもったいない」と、わざとゆっくり読み進めたほど楽しく魅力的な本です。
　主人公の女の子は、お母さんと二人暮らしで貧乏な生活を送っています。貧乏な話のはずなのに、なぜか楽しくて笑ってしまいます。そして、いつの間にか読んだ自分が元気になり、「たくましく生きていこう😄」と思える本です。ぜひ読んでみてください!!

星名 誠先生

題名　この夏の星を見る　作者　辻村　深月

　亜紗は茨城県立砂浦第三高校の二年生。顧問の綿引先生のもと、天文部で活動している。コロナ禍で部活動が次々と制限され、楽しみにしていた合宿も中止になる中、望遠鏡で星を捉えるスピードを競う「スターキャッチコンテスト」も今年は開催できないだろうと悩んでいた。真宙（まひろ）は渋谷区立ひばり森中学の一年生。27人しかいない新入生のうち、唯一の男子であることにショックを受け、「長引け、コロナ」と日々念じている。円華（まどか）は長崎県五島列島の旅館の娘。高校三年生で、吹奏楽部。旅館に他県からのお客が泊っていることで親友から距離を置かれ、やりきれない思いを抱えている時に、クラスメイトに天文台に誘われるーー。
　コロナ禍による休校や緊急事態宣言、これまで誰も経験したことのない事態の中で大人たち以上に複雑な思いを抱える中高生たち。しかしコロナ禍ならではの出会いもあった。リモート会議を駆使して、全国で繋がっていく天文部の生徒たち。スターキャッチコンテストの次に彼らが狙うのはーー。
　哀しさ、優しさ、あたたかさ。人間の感情のすべてを感じてみてください。

第７１回青少年読書感想文全国コンクール課題図書　中学生の部

わたしは食べるのが下手

天川栄人

　少食で食べるのが遅い葵は、食事の時間が苦手。とくに給食は…。「小林さんさ、たぶん君、会食恐怖症だわ」無理に油淋鶏を飲みこんで気持ちが悪くなった葵は、保健室でクラスの問題児、咲子にそう言われる。実は咲子も、食にかかわるある悩みを抱えていた。そんな二人は、新任のイケメン栄養教諭に焚きつけられて、給食改革に乗り出すことに…。わたしたちが望む給食って、いったいどんなだろう？

スラムに水は流れない

ヴァルシャ・バジャージ

　そもそもの問題は、水がたりないことだった。

　インド有数の大都会ムンバイ。12歳のミンニと15歳の兄サンジャイが暮らすスラムには、ムンバイの人口の40パーセントが住んでいるにも関わらず、水は市全体の5 パーセントしか供給されていない。水不足がきびしくなる三月のある夜、サンジャイが「水マフィア」を目撃してしまい……。家族の絆、友情、そしてインドの「今」を描く、勇気と成長の物語。

家族とフィールドワークを進めた人類学者　鳥居きみこ

竹内紘子

　鳥居きみ子の夫は、「知の巨人」ともいわれ、明治から昭和時代にかけて活躍した人類学者、鳥居龍蔵です。彼の生涯や研究業績を紹介した本はたくさんありますが、きみ子のことはこれまで紹介されたことがほとんどありません。じつは、「家族とともに調査・研究する」という形で、女性の活躍が厳しい時代を生き抜いた先駆的な研究者なのです。人類学のなかでも、昔から伝わる生活・風習・伝説・歌などを調べる民族学を切り開きました。その生涯をはじめて伝える一冊です。